

玉
津宮
神
無
シ





遙か地の底、忘却の旧都。百目鬼門^{ドゥメキモン}はかつての旧地獄の庁舎が残る区画だ。地獄機能の移転とともに放置され、今は傾き朽ちた廃屋が寂れるばかり。

宿や夜店が軒を連ねる旧都大街道の喧騒も遠く、薄黒い燐を焦がす鬼火の灯りだけがちらちらと燃えている。

門の前の広場、胴周りが十尺もある古木の根元にいくつもの大樽を抱え込み、星熊勇儀は一人手酌で酒を汲んでいた。自慢の星熊杯を握むがっしりとした肩、額から伸びる赤い一角は、これ以上ないほどの力の象徴だ。穏やかに古木に背を預けているだけだというのに、全身に漲る力がはつきりと見て取れる。

こう、と風が揺れた。

巨大な地下空洞は、地下の灼熱地獄の熱で緩やかな大気の対流を起こす。旧都の活気が起こす水蒸気は、頭上の岩肌で冷え、白い雪の結晶となって舞い落ちる。一年三百六十五日、変わらず旧都には雪が降り、そして地に積もることはない。

朱塗りの大杯に満ちた酒精に、ぼつりと雪の結晶が落ちる。それが溶ける前にぐいと杯を干し、鬼は満足げに口元をゆるめた。

いまは旧地獄街道の顔役として知られる彼女は、たまにこうして喧騒を離れ、寂れた旧都の端で一人酒を愉しむことがあった。そんな時には大抵、彼女の傍には嫉妬深い橋姫の姿が寄り添っている。万が一にも逢瀬の邪魔をし機嫌を損ねてはならないと、他の妖怪達は決して近付こうとはしない。

けれども今日、勇儀の傍には人影はなく、彼女は辺獄で一人黙々と持ち込んだ酒樽を干していた。古木の根元には既に三つばかり空になった樽が転がっている。

「……ん」

幾度杯を重ねたか、勇儀はふいに口元をぬぐって視線を上げた。それまで茫洋と漂っていた周囲の妖気がその色合いを変えていた。辺りに満ちる気配が急激に濃くなり、宙の一点に収束する。

燐火を伴う爆発が起きれば、そこには彼女と良く似た装いの、小柄な少女の姿があった。

ねじくれた二角、手枷から伸びる三本の鎖。頬は赤く、ふらふらと千鳥足。とろんと人懐こい笑みを見せる彼女、見てくれこそ十にも届かぬ童女のようなだが、その小さな体躯には滾るマグマを押し籠めたかのような強烈な陽気が満ちている。

彼女こそ、かつての妖怪の山の頂点——騒がしき百万鬼夜行、

伊吹萃香。

「悪いね勇儀、遅れた」

「待ち草臥れた。もうみんな吞んじまったよ」

答えて勇儀は手元の樽をひっくり返して振る。酒豪の狸々でも酔い潰せるほどに強い酒精を五樽は空にしているが、勇儀の頬にはわずかに朱がさした程度だ。

「……そんなこつたろうと思ったよ」

萃香がちらと振り返れば、そこにはまたも五樽ばかりの酒樽がやってきていた。樽を運んでいるのはミニサイズの萃香たち——疎密を操る鬼の分身である。大樽を勇儀の前にずらりと並べ、固めた拳でがんと蓋を叩いて鏡を割れば、透明な酒精がなみなみと露わになった。

「おお」

「天領の杯、越佐の外來の酒だそうだよ。最近、あちこちで羽振りのいい化け狸から挨拶につね」

萃香の口上に勇儀が相好を崩す。おおよそ、地下の旧都では外來の酒は希少品である。鬼には伝來の銘酒を生む宝物が沢山伝えられているが、いくら美味くとも四六時中呑んでいれば唾と似たようなもので、流石に飽きも来る。

勇儀は背から朱塗りの大盃を二枚、取り出した。そのうち一枚を萃香へと放る。受けとった萃香はそれをくると回し、

「あんたと呑むのも久しぶりだね」

「この前、地上で会ったばかりじゃないか」

「……ここで呑むのが、さ」

二人は樽の中から直接、ざぱりと酒精を汲み上げた。杯を触れ合わせるように重ね、ぐいと煽る。

「んんっ……」

ぐびぐびと喉を鳴らし、半升もあろうかという酒を一息に喉へと流し込み、勇儀は満足げに息を吐いた。

「ふむ。なかなかイケるね。酒虫もロクに使えないだろうに、人間も良くやるもんだ」

「まったくだね」

頷き、萃香はすぐさま二杯目を口にし、勇儀も続けて杯を重ねてゆく。しばし二人は外來の銘酒を存分に味わった。

一樽半が空になった辺りで、勇儀はがりりと杯の端を齧り、口元を緩める。

「……で、こんなもんまで差し入れて、本題はなんだい、萃香。あんたがここに來たがるなんてよっぽどなことだろう」

「ああ」

とろんとした表情で、萃香は頷いて見せた。そう。萃香はただ旧交を温めるだけが目的でここを訪れたわけではない。

本来、地底は地上を追放された妖怪達の住処であり、地上との交流は固く禁じられていた。最近ではだいぶそれも緩くなっているが――袂を分かった萃香が訪ねていくこと自体、そもそもが筋違いなのである。旧都の端、廢墟ばかりが並ぶ百鬼門を勇儀との面会場所を選んだのも、他の妖怪達に配慮してのことだった。

じゃら、と鎖を鳴らして杯を干し、萃香は答える。

「ひと探しさ」

「……？　なんでまた」

「なあ勇儀。最近地上であつた騒動、知ってるかい？」

少し前の事になる。長年使われてきた道具達が意志を持ち、勝手に動き出したことに始まる一連の騒動があつた。愛用のお祓い棒やミニ八卦炉が動き出したことに疑念を持った巫女や魔法使いはこれを異変だと考え、いつものように黒幕を退治するために乗り出した。

普段おとなしい妖怪達がやけに好戦的になり暴れ出しているのを叩きのめし、彼女達にも何者かが力を持たない者たちに力を与えている事を知った巫女たちは、嵐の中に浮かぶ逆さ城の中で、打ち出の小槌を振るう小人と、彼女に強きものへの反抗を唆した天邪鬼に辿り着いたのだと言う。

「小槌か。……随分懐かしいもんが出てきたねえ」

昔話にも語られる打ち出の小槌は、伊吹瓢や星熊杯と同様、鬼によって作られた宝物のひとつであつた。所持者の望みに応じて力を振り出し、いかなる望みも叶えることができるその小槌は、

かつて鬼達から小人の英雄の手に渡り、長らく行方が知れなくなっていたものだ。

「つてえと、萃香、その小人つてのに逢ったのかい」

「ああ。……あいつに良く似た、まっすぐな奴だったよ。人を疑う事のない馬鹿正直なやつさ」

わずかに苦いものを滲ませつつ、萃香。いかなる願いも叶える小槌は、容易く所有者を随落させる。初代一寸法師の子孫である小人一族は皆その魔力に惑わされ、その代償に多くのものを失った。それから時を隔てた現在の所有者、少名針妙丸も例外ではなかった。彼女は弱者による強者の下剋上を題目に、力なき妖怪達に力を与えていたらしい。やがては彼等を賛同者に募り、レジスタンスとして幻想郷に革命を起こすつもりだったのだ。

その企みはひっそりと静かに侵攻し、思わぬ場所にまで食い込んでいた。事実、霊夢や魔理沙は小槌の力で意志を持って動き出した道具達に操られ、目的を見失って散々な目に遭っていたのである。久々に屋敷を出た紅魔館のメイドが冷たいナイフと辣腕をふるい、異変の中核たる小人を押さえたことで、事件はようやく収束を見た。

「まあ、異変自体はもう収まってるのさ。小人は神社に捕まってるし、そもそも騙されてただけだったらしい。元々が小槌から振り出された力によるもの、時間が過ぎれば勝手に力も回収されて元通りだ。付喪神達の方も落ち着いたようだし、霊夢はこれで一件落着と思ってるようなんだけど……どうもそうは言ってられないみたいだね」

「あん？」

「騒動の黒幕の、もう片方が見付からないんだ」

針妙丸を唆した張本人、鬼人正邪を名乗る天邪鬼の行方が分からないのである。

なにしろ元々が天邪鬼、雑魚とほとんど変わりのない妖怪だ。隠れようと思えば雑多な気配に紛れてしまう事は容易い。霊夢も魔理沙もあちこちを探しまわったようだが、いまだに行方は遥として知れず、すっかり諦め気味なのだという。

「天邪鬼、ねえ。別に放っておいても害はなさそうなんだけど。どうしてそんな奴をお前さんが気にするんだい」

「覚えがあるのさ」

苦い息とともに、萃香は杯を煽る。鬼の強い酒精で、ずっと喉の奥に引つかかっていた、棘を溶かして飲み込もうとするかのよう。

「なあ、覚えてるかい勇儀。大江山で頼光とやりあった頃に、私の山に居た。やたら弱っちい奴がさ」

「——んんん？」

眉を立て、大きく首を捻る勇儀。どうやら言われてすぐには思い出せないくらいには忘れていたらしい。正直、自分と脳筋度合いでは大差ないはずなんだが——と萃香はかつての同朋が難しい顔をしているのを眺める。

「ほら、やたら負けず嫌いで、意地っ張りで、そのくせ腕はからつきしの。角が生えてりや鹿でも甲虫でも鬼かって、苛められてた奴さ」

「……ああ！ 思い出した！ そうだね、居たな、そんな奴。」

ようやく思い至ったか、勇儀はばしんと膝を叩いた。

そう、確かに居たのだ。まだ天地にはつきりと明暗が引ききられていない黎明の時代。人と妖怪が対等に争っていたあの時代。

大江山に陣を張り、都の武者源頼光たちと組み合った酒吞童子配下の鬼に、確かに彼女の姿はあった。

萃香も名前は覚えていない。鬼の社会において、強さと個の認識は等号で結ばれるものだ。弱い鬼など誰にも見向きもされなくて当然だ。そこいらの人間にも負けてしまう、危うくて弱い同朋など、居ないも同然と扱われていた。

——けれど、そいつは鬼だったのだ。まったくもって卑怯で臆病で、強さの欠片もなくとも、そいつは確かに鬼だったのだ。

それがいま、鬼人正邪を名乗る妖怪の正体だと、萃香は語る。「良く覚えてるもんだねえ、そんな奴の事まで」

「ん、……まあ、気になったのさ」

萃香は言葉を濁し、ゆっくり盃を煽った。人魂を追いかけてふわふわと漂う亡霊魚の骨を掴み、指先から放つ陽気の炎で焙つて口に放り込んだ。香ばしい幽骨をバリバリと噛み砕きながら、眉をよじって吐息。

「柄じゃないとは思うけどね、昔のよしみってやつだよ。顔見知りが零落してるのを見過ぐすのは忍びない。根城も失くし、打ち出の小槌も使い手ごと捕まって、魔力の回収期に入った。元の通りの天邪鬼が一匹じゃ大したことできないだろうけれど、どうにもやり口が気に入らないのさ。……地上に居辛くなった連中は、大概ここに流れてくるだろう？」

「ふむん。……旧都に流れてくる連中の事ならまず私の耳に入ってくるもんだが、今のところそういう話は聞かないね。パルスィも素直に通すとは思えない」

「どうかね、あいつは天邪鬼だ。本心を偽るなんて朝飯前だろう。覚なら一発でお見通しだろうが、あれは地霊殿を滅多に出てこな

いじゃないか。……鬼には一番面倒な相手だよ。言っちゃあなんだが、ここじゃ勇儀が一番謀られやすい」

「つは、まったくだねえ」

つまり、勇儀も知らず正邪に唆されているのではないかと言外に言っているのだが、旧都を根城にするかつての山の四天王は、萃香の指摘に気を悪くした様子もなく豪快に笑った。

「そんなわけだから、しばらくここで探させてもらいたいのさ。……この連中と下手に喧嘩にでもなったら面倒だ。一応はあなたに話を通しておこうと思つてね」

閉鎖的な環境に暮らしてきた地底の妖怪達は余所者に敏感だ。その筋を通すための来訪だが——疎密を自在にできる萃香がその気になりさえすれば、姿も気配も消す事など容易い。それでもあえて勇儀の元を訪れたのは、彼女の顔を立てるためでもあった。

「律儀なもんだね。喧嘩にやられた腹いせに——なんて陰湿な奴が多いのは確かだろうけど」

からからと笑う勇儀。そんなことは起きはすまいと、心から信じて疑っていないのだろう。

「まあ、気のせいでも済むならいいんだけどな」

「……あたしは大体、街道の宿にいます。暇なら声をかけてくれ」最後の一樽を抱えて飲み干し、勇儀はずしりと地響きを立てて腰を上げた。

自分のぬぐらにしている宿の名を告げ、去つてゆく勇儀を見送り、萃香は一人吐息する。

「柄じゃないか。……まあ、そうなんだろうな」

今はバラバラになつてしまつた山の四天王——かつての妖怪の山にあった自分達の同朋たち。彼らの元を離れたのは萃香の方な

のだ。今更末練がましいと言われればその通りだろう。橋姫なら、まったく仲間思いなことね、お優しくて妬ましいわ、と皮肉でも言っていくところだ。

おおよそ。

鬼らしくないと言われれば、一番自分がそうなのだと、萃香は思う。過ぎた昔、終わった過去を一番引きずっているのは自分なのだと。

ぐいと伊吹瓢をあおり、頭をよぎるのはかつての友人達の顔だ。珍しく深く酔いが回っていることを自覚して、萃香は天を仰いだ。深い地の底の旧地獄、光の届かない空から、鬼火に照らされた雪がちらと舞う。

「参ったねえ。どうにも余計な事ばかり思い出す」

もう一度伊吹瓢に口を付け、一人ごちた酔鬼の背中中は、ゆつくりと地底の闇の中へと溶けていった。



「これはこれは。大将御自らのお出ましとは、光栄の限りだな」
ぺたり。立ち枯れた古木に張り出した枝の、下。天地の上下などお構いなしと嘲るかのように、上下さかさまに腰かけて。

ようやく見つけ出した反逆の天邪鬼、鬼人正邪は小さな唇からちろりと舌を覗かせる。艶めかしくも赤い舌は、幼い容貌と相まって妖しげな妖艶さをたたえていた。

実力差が天と地ほど明らかな萃香を前にしても、正邪はまるで

動じた様子がない。苦楽を逆にするつむじ曲がりの天邪鬼は、窮地や危機などというものとは無縁なのだ。

「わざわざこんな地の底まで私を追いかけてきたとは、鬼の大将どのはご立派だね。まったく頭が下がるよ」

「ふん、嬉しそうな顔しやがって」

にやにやと笑みを深くする天邪鬼の、殊更に心にささくれを立てるような物言いに、萃香まで語気が荒くなる。それが彼女の手なのだと分かっている、応じずにはいられない。

「鬼の面汚し、か。滑稽だな。何を怒ることがあるんだ？ まさしくお望み通りじゃないか、大将。お陰さまで私はこうして、鬼である事を止めてやったんだ」

べろん、長い舌を艶めかしく覗かせ、くるりと萃香に背中を向けて正邪は嗤う。

「……それが、お前の言う鬼の在り方ってやつか？」

「そうさ。なあ大将。鬼つてのはね、もう、強くてはいけないのさ。卑怯で、嘘つきで、惨めに逃げ出し、赦しを請うくらいじゃなくちゃ駄目なんだよ」

大江山の鬼達は、時代遅れだったのだと正邪は嘯く。

鬼が人と正々堂々相對し、互いに死力を尽くして勝負するには、彼女達は四〇〇年ばかり遅く生まれすぎたのだと。

「大将みたいなには分からないだろうね。人は鬼なんて必要とせず、鬼はとつくの昔に衰えてたんだ。私のような弱く貧しい鬼が生まれていたのがその証だよ」

事実、源氏の武者たちは謀略を用いて鬼を塵殺した。神話の英雄と相對し、組み打つ時代に遅れた鬼達はそうやって、物語の中で、卑怯で惨めな悪役として生きなければならないのだと、孤独

な天邪鬼は言う。

「だからお前はそんな名を名乗ったのか。ご丁寧に、二枚舌まで生やして」

「——ご名答」

べえと舌を覗かせ、正邪は笑う。彼女の髪のひとつ房を飾る赤い髪は、彼女のもつあまのじやくの本質だ。本心を偽り、嘘を口に、巧みに人を謀るための、二枚舌。

「我が名は正邪。鬼人の姓にて悪を騙るあまのじやく。善悪を、喜悅を、真偽の全てをひっくり返して——そのためならば、己などいくらでも偽ってみせるさ」

ねじれ曲がった性根を前にした気分の悪さに、知らず瓢箪に口をつけようとして、ふと。まじまじと紫の伊吹瓢箪を見つめ、萃香は思い切り嘔き出した。

「ああ……成程、そうか、そういうことか」

肩を震わせる鬼に、周囲の鬼火がばあつと散ってゆく。

「妙につまらんことばかり気になって、酔えなくなっと思ったんだけど——そりやそうだ。呑み干されてたのは、私の方か！」

ばしんと伊吹瓢箪を叩き、萃香はぎらりと正邪を睨む。

「ここにこの引きずり出された間抜けな鬼が私で、そいつがお前さんの——弱者の意趣返しってわけだ」

ここでも下剋上は成っていたのだ。伊吹萃香は常から酔気の中にふわふわと漂う鬼だ。なかば酒に寄って成り立っていると言つても構わない。だからこそ、萃香は自分が酔っている事に気付かずにいた。意志をもった伊吹瓢箪——その酒気に。

看破された正邪は、しかし悔しがるどころかますます笑み深くするばかり。

「あなや、参った！ けれどそれもこれまで。大将がここに来たということは、失敗してしまつたわけだ。ああ、まったく嫌になるな。どうしてこうも、思うようにいかないのだろうかね！」

白い二本角を生やした髪を書きあげ、芝居がかった仕草で顔を覆い、正邪は嘆きを装って笑う。

自分の行動を。翻弄される人々の心を。何もかもをさかしみに、苦を楽に、悲哀を喜悅にひっくり返して、その中心に一人、愉しそくに——嗤うのだ。

げらげら。

げらげらげらげら。

「——ああ、本当にまったく嫌になる。お前みたいに、鬼らしい鬼は見たことがない」

萃香は静かに吐き捨てた。吉備津彦命^備に退治され、坂田金時^金に退治され、一寸法師に退治された——鬼のように。人がそうあつて欲しいと望んだように、鬼であつた。

妖怪は、呼ばれる事で名を与えられ、その性質を変えて生まれ変わる。正邪は弱き鬼から人を惑わす子鬼、天邪鬼へと生まれ変わったのだ。賢しちに主を焚きつける天探女^{アノサツメ}、あるいは、本来の役目を忘れ国津の僭主となる天稚彦^{アメノササヒ}か。

萃香の隙を突くように、正邪はたと地を蹴った。

「天津宮を遙か背に、国津宮に神は無く、ただ、野辺を彷徨うあやかしが一匹！」

なれば問う。汝、その行く末とは何であるか？「瞬天。ぐるりと視界が揺れる。天地が逆さまになり、上下が

裏返り、左右がひっくり返り、善悪も正邪も入れ替わる。

気付けば、萃香は宙に放り出されていた。

——逆弓「天壤夢弓の詔勅」

廃屋、枯れ木、大岩、周囲のあらゆるものも含めて丸ごとが、頭上に向けて墜ちてゆく。地より墜ちる天羽々矢の鏃が、鬼の業を貫こうと、雨霰と叩きつける。

「ふん、——つまらん小細工だ」

しかし萃香は動じない。空気の疎密を操り、だんと飛び散る瓦礫をあつめて作った足場を、小さな大地として踏み締めて。上下さかさまのままの正邪と対するように、しっかりと地を踏み締めたまま。己が地面と定めたそこから、動かない。

「難儀なものだ。思っていることと正反對のことしか言えやしないつてのは、結局馬鹿正直な心根の裏返しだよ。本物の嘘吐きなら、騙すべきときだけ嘘を吐くさ」

どこかの悪戯鬼をふと思ひ出し、苦笑とともにぼやいて萃香は大きく息を吸い——そのまま、伊吹瓢をひっくり返した。さばりと滝のように溢れだす酒精を、残らず腹の中に納めてゆく。空になった瓢箪をひよいと放り投げ、騒がしき百万鬼夜行はゆつくと正邪を見上げる。

「まったく、すっかり酔いが醒めたよ。生まれてこのかた、素面になるなんて数えるくらいしかないつてのに、これじゃ伊吹の鬼の名折れだねえ」

そうして、天邪鬼の顔をひたと見つめ、その名を呼んだ。

「なあ、そう思わないかい、正邪！」

萃まる夢、幻、そして百鬼夜行。その名の通り、大江山の頭領であつた鬼は、かつて歯牙にもかけなかった、一匹のあまのじゃくに真つ向向かい合う。

萃香が本気だと悟つたのだろう。正邪の表情に凄みが増した。「まだまださ。大将。あんたには存分に弱者の気分を味わってもらうよ。この、何もかもがひっくり返る地の底でね！」

「やってみな！」

——四天王奥義「三步壊廃」

「その下らん小細工ごと、全部ぶっ壊してやるさ！」

正邪の顔にありありと浮かぶ喜悦を見、萃香は満足げに拳を固め、地を蹴った。

まったく、鬼というのは難儀な生き物だ、と嘯み締めながら。

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『国津宮二神ハ無シ』は、かつての妖怪の山の支配者であった鬼、伊吹萃香と、反逆の天邪鬼・鬼人正邪の過去を捏造したりする、当サークル二十八冊目のSS本となります。

さて、輝針城のおまけでもあまのじゃくは鬼とは別物との記述がありますが、あまのじゃくの登場する昔話に「うりこひめとあまのじゃく」という有名なものがあります。純朴なお姫様をあまのじゃくが騙して入れ替わり、悪さの限りを尽くしてゆくというストーリーですが、このお話、最終的に正体を見破られたあまのじゃくの顛末が地域によって異なるといふ研究があるそうです。

この昔話自体は地域を問わず全国的に伝えられているそうなのですが、近畿あたりではあまのじゃくが正体を見破られた後、あつさりと殺されてめでたしめでたしとなるのに対し、関東以北ではしぶとく逃げ延びて命を長らえるというように、はつきりと地域差が生じているのだとか。ここに国の中心となる朝廷と、辺境のまづろわぬ民の地域性を考えてみると、あまのじゃくはやはり鬼だったのではないかと思ひ至り、こんなお話ができて良かったです。捏造満載ですが、楽しんでいただければ幸いです。

さて、今回の表紙にも、四季悠々様の素材をお借りしました。いつもありがとうございます。

また発刊にあたり、いつもながら白身氏、Riza氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

【奥付】

クニツノミヤ カミ ナ
「国津宮二神ハ無シ」

平成25年9月23日

鬼夢想

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。



— それでは。
また次の機会にお会いできることを願って。

茨木童子



星熊童子



伊吹童子

